

回想 服部英太郎先生と服部文男先生のこと

相澤 與一（福島大学名誉教授）

1. お礼のご挨拶

このたび、由緒ある尚絅学院の大学図書館が服部英太郎先生と服部文男先生が遺された貴重な蔵書のうち6千冊余を受け入れられ、「服部英太郎・文男遺文庫」として整理・開設され、内外の研究者に公開して下さることとされたことに、心から敬意と感謝を申し上げます。またこのことに尽力されたその他多くの関係各位にも深甚なる敬意と謝意を表します。英太郎先生と文男先生は、それぞれ個性的な方でしたが、ともに本当に優れた学者で思想家、そして教育者でした。それぞれが世界に誇れる研究と教育の業績をあげられました。その背後には優れた蔵書もあったわけです。

片平丁の文男先生の研究室では、書棚に収まらない本が床に横積みされていくつもの山をなしていました。一方、英太郎先生は生涯ご自宅を建てられず借家住まいで、米ガ袋の借家の書斎兼応接間におかれた大きな座り机の上に、本が横積み山をなしていた様子や、片平丁の研究室では沢山の本が隣の書庫を埋めていた様子が思い起こされます。

英太郎先生の奥様から伺ったことですが、仙台に赴任されてこられたとき、仙台駅頭に洋書の専門店、丸善の職員の出迎えがあったそうです。先生が丸善の大のお得意だったからです。とにかく先生はよく本を買われていて、時間があれば読書に耽るのが常で、そしてとても書物を愛し大事にされました（『服部英太郎著作集』月報3の5頁）。

いずれにせよ、服部両先生が大事にされご研究に用いられた貴重な蔵書の重要な部分が、この「遺文庫」として整理・公開され、この先、後世にも役立てられることは、まことにすばらしいことです。

2. 私の今日のはなしのいきさつと限定

今日、私がここですこし話をさせていただくことになったのは、英太郎先生と文男先生の両方から教えを受けたりして直接、両先生を存じ上げている人が稀有になっているので、話をしたいとのご依頼を受けてのことです。幸い文男先生については直弟子の黒滝さんがお話をされるといいますので、私は主に私の側から観た英太郎先生について、こぼれ話をさせていただくことをご勘弁いただきたいと存じます。

なお、服部先生ご一家について語る時、除外できない大きな論点の一つは、本学の佐々木学長さんご紹介されておられる戦時下での弾圧の受難です。当時の文部省は、英太郎先生の講義ノートを過去にさかのぼって検閲し、その内容が国体・国情に合わないとして「依願免官」を強要し、1942年11月に英太郎先生を大学から追放しました。するとすぐ当時の公安警察「特別高等警察」つまり「特高」が治安維持法違反の容疑で先生を検挙し、連日取り調べたのですが、起訴出来ず起訴猶予としたのです。それでももう一つの思想弾圧法だった「思想犯保護観察法」を適用し、隔離と予防拘禁のために先生ご一家を東京に強制移住させ、特高の監視下に置き、論文の執筆発表も含め社会活動を禁止しました。

このくだりは、文男先生の講話記録『私が見た「昭和」』からよく読み取れることです。戦後も占領軍が先生親子間の手紙を開封し検閲したことが写真付きで記録されています。

英太郎先生は、失業と低賃金、高い年貢などによって民衆を困窮させ戦争を繰り返した支配権力に都合の悪い社会正義の学問を追究され、そのために弾圧されたのです。

ただし今日の私のはなしは、うんと限定して、私個人がどのような恩恵を受けたのかについて例示することで、間接に両先生の人と学問の一端をご紹介させていただきます。

3. 服部英太郎先生と私

私は、英太郎先生の直弟子として、社会政策を専攻しました。現在もそう名乗ってものを書いています。一方、文男先生からも少し授業も受け、仙台を離れたあとも何度か教えていただきました。

ただし、私は両先生がおられた経済学部の卒業生ではなく、文学部の卒業生です。小説を濫読するのも好きだったからという、実にいい加減な動機で文学部を選んだのでした。しかし、結局、学部では西洋史学科に籍を置き、1956（昭和31）年に学部を卒業しました。作家になる蛮勇も能力もなかったからでしょうが、積極的には社会科学に接近したのです。

私が社会科学に接近したのは、むしろ三神峰の教養部から片平丁の学部にかけての在学中に、大変厳しい社会的緊張に出会ったからだろうと思返しています。

その一つは、山形の私の在所在が朝鮮戦争（1950～53年）の時から米軍の射爆場（「大高根射爆場」）とされ、近所で反対運動が警官隊と衝突し人が死ぬことなどが起こっていたことです。また一方、仙台では、片平丁キャンパスのすぐ近くの仙台高等裁判所で、松川事件の裁判の控訴審が行われていて、その判決の行方が全国から、いや海外からまで注視されていました。それらは私にとって胸が苦しくなるほどの緊張でした。その第二審判決は私が2年生だった1953（昭和28）年の12月22日、仙台でも雪が舞う日に行われます。

それらのせいで、社会問題に強い関心を持つことになり、学問的にも政治経済や社会問題への理解力を高めたいと願うようになったのだと思います。そこで文学部の学部生の時から英太郎先生の演習を傍聴させてもらい、そのあと大学院経済学研究科では英太郎先生に指導教官をお願いし、それがその後の私の学問的生涯を決めてしまったのです。

第一には、私は英太郎先生の学問を継承したのだと勝手に僭称するほどの大きな学恩です。先生は、当時の東大教授、大河内一男先生の社会政策理論と労働組合運動論を批判する「社会政策の生産力説への一批判」と題する論文を、月刊誌『経済評論』の1949年の2月、3月、4月号に3回連載され、戦後社会政策論争の口火を切られた方として有名でした。また『ドイツ社会政策論史（上）』や『賃金政策論の史的展開』の著者で、重厚な碩学として知られておりました。

なお、英太郎先生の主な著書と論文は、英太郎先生が急逝された翌年の1966年からほぼ10年間をかけて未来社から刊行された『服部英太郎著作集』全8巻にはほぼ網羅されています。この『著作集』は、実質的には文男先生が編集の主役を果たされたものであり、文男先生の大きな学問的業績の一つなのです。『著作集』各巻の函の表紙に、「わが国の社会政策・労働問題研究の学問的発展のうへで画期的な意義をもち、とくに国家独占資本主義下の社会政策の課題を一貫して分析・解明した服部英太郎博士の未発表・既発表の先駆的な諸業績を集大成した学会待望の著作集」と記されています。英太郎先生の学問の位置を端的に要約したものです。

先生は、ご存じの方はだれもが言うように、実に寡黙の人でした。しかし、ゼミのコンパのときなどは、にこにこされていて、学生とのお付き合いを楽しまれておりました。先生の奥様

が書かれた文章、これがまた珠玉の文章なのですが、そのなかで、先生が学生は将来ある宝物なのだから大事に遇しなければならぬという意味のことを言われていたと書かれていました。が、英太郎先生ご夫妻の我われに対する対応は心のこもったものでした。

この点は、文男先生にも見事に受け継がれていたと、私は感じています。

なお、英太郎先生の旧宅をおたずねした折のことで、印象深い思い出があります。拙稿の草稿についてご指導を頂きたく、原稿をお渡しして2～3週間後の冬のある日、予約させて頂いていた日時に、広瀬川に近い米ヶ袋十二軒丁のお宅にお邪魔し、私の草稿についてその後に気付いたことを勝手にお話をし、先生はうん、うんと、頷かれはしましたが、肝心のコメントは言われません。ガスストーブがゴー、ゴーと音を立てているだけで、大分ながく沈黙が続きました。30分もたったような感じでした。今日はコメントをお伺いできそうないなと思い、これでお暇しますとご挨拶して立ち上がろうとすると、先生は「あの原稿はあれでいいと思う。今日、言われたことも生かしたらいいのでは」といわれ、私はありがとうございます、とお礼をし、辞去しました。じっくり考えさせ、必要なことは自分で気付かせる、ということだったのでしよう。

そんな経過を経ての、激動の「60年安保」の年の3月付で発行された、東北大学経済学会研究年報『経済学』第55号に、私の最初の公表論文「英国における1912年炭鉱最低賃金法の成立」が掲載されました。少々幸運なことに、それが日本評論社の月刊雑誌『経済セミナー』で、「本年度の労作」の一つに挙げられました。集会とデモに明け暮れる政治の季節が始まっていたはずで、つくづく書いておいてよかったと思います。

もちろん、私のキャリアでも大きなご恩を受けました。その一例は、学位論文についてです。いわゆるオーバー・ドクターとなってもまともな職を得られないまま、不本意な半端な講師の職に就くために上京した私の将来を先生は大いにご心配になられたのでしよう。当時の文系としては全く珍しく、博士の学位論文を書かないか、と慫慂されました。すぐ上の諸先輩にも私などよりよほど優れた人びとがいたのに、彼らを飛び越してのお勧めだったのです。私はこのお勧めにこたえ、上野の近くの西黒門町の間借り部屋にこもってがむしゃらに大部の論稿を書きながら提出し、新制東北大学大学院の経済学博士第2号を頂くことになりました。要するに最初の課程博士二人のうちの一人となったのです。私はその後、何度も新設の大学や学部や大学院の発足要員として文部省の大学設置審査会の教員審査を受けたのですが、クレームがついたことが一度もありません。それにはこの学位取得も役立ったはずなのです。

もうひとつ面白いかもしれない話をしましょう。私は学生時代、一貫して貧しさだけはトップクラスでした。院生になってからも、育英会の奨学金を在籍者で均等割りしての月額八千円だけでは暮らしにも困り、とても本は買えない生活でした。そこで仙台で図らずも再会した少女時代から旧知だったのちの妻に求婚し、彼女が22歳で卒業しここ名取市の保健師に就職したばかりの春に結婚しました。つまり実質的には妻の扶養を受けることになったのです。友人たちが仙台市役所近くのレストランで結婚披露宴を開催してくれ、英太郎先生にもご出席いただき、おまけに友人が河北新報の記者を、いまだき珍しい会費制でやる結婚披露宴だと吹き込んで呼び寄せ、翌日の紙面に写真入りの記事が載りました。広告料なしで結婚を広告できたわけです。彼女は5年間、名取市に勤めたあと、私が上京することを決めた途端に、当時は有楽町にあった東京都庁の衛生局の職員の職を得、一緒に上京しました。4年間の在京時代もおおむね彼女の方が私より給与が高かったのです。名取市から彼女が受けたわずかな退職金も、全

額、私の博士論文のタイプ印刷代に化けました。ひどい話でしょう。その罰ではないのですが、私はじき満80歳になるいまも、まだ大学院の「特認教授」の肩書で細々と給与を得ているのです。

在京時代には、何度かは英太郎先生が上京時の定宿とされた新橋の第一ホテルなどでお会いすることができました。私ら夫婦は、長男のひどい難産もあり、また当時の都内のひどい住宅難で難儀し、公団住宅への優先入居資格となる30回落選の回数を稼いでいました。

そんなとき、九州の佐賀大学が旧制佐賀高校の後身の文理学部を分離改組して経済学部を創設することになり、人を介して社会政策論の担当教員の候補にならないかと打診され、結局これを受けることになり、文部省の教員審査も通りました。

当時、長女を妊娠していた妻を東京に残して九州に単身赴任することなど考えられず、一緒にゆくことにしました。後で振り返ると、それは妻の専門の定職を打ち切ることになる蛮行であり、若気の過ちだったのです。とにかく佐賀大学への転任が内定したとき、その経緯を先生にご報告するお手紙を1965年の12月に差し上げたのでした。

福島大学の学長の2期目に入ったばかりだった先生は、それをゆっくり読もうとされたのでしょう。朝、その手紙も鞆にいれて官舎から出勤するために立ち上がったとき、動脈が破裂して倒れられ、間もなく絶息されました。最後までご心配をおかけしっぱなしでした。年が明けて1966年1月の寒さの厳しい日に、昔の福島大学経済学部の大正時代に建てられた講堂で執り行われた大学葬で、私はただただ悲しく、涙を流し続けました。

その当時、東大総長だったはずの大河内一男先生が、持参された弔文の封も開けずに遺影の前に捧げ、原稿なしで英太郎先生を偲び急逝を惜しむ言葉を語られたご様子は、通説だった語りのうまさをこえて、真情あふれ、心を打つものでした。

なお、大河内先生は、『服部英太郎著作集』の第一巻のしおり「月報3」に、学会にとって大きな意義をもつ著作集の刊行を慶賀する文章を寄せられました。その中で「戦前、戦中、戦後を通じて、(服部英太郎)博士くらい『社会政策』の理論に執念をもちつづけた学者はいない」。「博士は、私にとっては、社会政策論研究の上での、数少ない先輩の一人であり、日本における社会政策学の将来を心痛した同学であり、そして私の最も尊敬する論敵でもあった」と書かれています。社交辞令ではなかったと思います。

私たち夫婦は、九州には土地勘がなかったので、福岡市の若久の公団住宅に住み、私は佐賀に通いました。佐賀大学では、英太郎先生の直弟子が遠方から来てくれたと、先生を知る田中定学長からまで実に親身のおもてなし、お付き合いを頂いたし、学生たちも好感もてる若者たちでした。しかし、ときは1968年の世界的な大争乱に向かう政治の季節であり、かの東大安田講堂の攻防の前年から佐賀大学では外人部隊を加えての激しい紛争が続きました。私は、過激な学生たちにも批判は大いにありましたが、呵責なく警察機動隊の導入と停学・退学の学生処分を繰り返す大学首脳部の対応に、我慢が出来なくなっていたからでしょう、教授会での投票で決まった学生補導委員への就任を拒絶しました。そこで心が折れたのでしょうか。その直後に、福島大学経済学部が社会政策論担当者の公募をしているのを知り、ひそかに応募し、他に有力な応募者が複数いたのですが、私にも競争力があって、採用が決まり、たったの2年半で九州を去り、福島大学に転任してきました。

それにしても、大学紛争で身も心もボロボロになったからだったとはいえ、忘れがたい濃密な知遇と経験を得た九州での時空をこんなに短期間でうちきるのだったら、東京にとどまって

いた方が、とくに妻にはよかったはずなのですが、まことに人生には、もしもという仮定法はなかったのだと痛感します。

爾来、44年、いまは原発災害に苦しむ福島に住み続けています。14年半前に65歳で福島大学を定年で退官したあと、信州上田の長野大学に3年通い、そのあと11年半、高崎健康福祉大学に創設以来、勤務し、いまは大学院の特認教授だけを残しています。

4. 文男先生とのことを一点だけ

私は、文男先生からは「外書購読」風の授業を受けましたが、当初は内容がほとんど理解できませんでした。文男先生は、外国語にとっても強かったばかりでなく、文献考証力においても非常な力をおもちでした。そういうことは黒滝さんにお願ひし、ただ一点だけ私の学問的な接点についてふれ、はなしを閉じます。

息子の病気と障害のために1995年以来、障害者福祉活動を続けていたこともあって、福島大学の定年後には福祉系の学部・学科に勤務し、社会保障論と公的扶助論を担当しました。そこでその分野の理論研究にも関心が向かい、その中で経済学における公的扶助論の理論的原点を探ることを試みたことがあります（拙著『社会保障の基本問題』未来社の第二章に再録）。文男先生は、ご労作『マルクス探索』（新日本出版社1999年）所収の二つの玉稿で、繰り返し私の拙稿を紹介されながら、「受救貧困」・「受救貧民」論研究の重要性を明らかにされておられます。今日の日本において生活保護問題が、「日本国憲法」25条の生存権保障とそれを担保するための社会保障のうち生活保護が「最後のセイフティ・ネット」としてますます枢要の問題となっているとき、文男先生の学問のご指摘は輝きをましており、その接点に学問的に參與できたことを幸せに思い、またありがたく思うものです。

ご清聴、ありがとうございました。

恩師 服部文男先生の生涯・研究と服部文庫

黒 滝 正 昭（宮城学院女子大学名誉教授）

I 服部文男先生の生涯と研究

服部文男先生は、1923年6月28日（木）午前9時、大阪府堺市の大島伸太郎（母方の祖父）宅で服部英太郎・美代夫妻の一人っ子として生まれ、2007年12月30日（日）仙台市の東北大学医学部附属病院に入院中に逝去された。享年84歳と6か月である。[このように曜日がすぐ分かるのは、文男先生から生前頂いた手作りの万年暦のお蔭である。因みに生年1923年の9月1日（土）関東大震災。昨年2011年3月11日（金）東日本大震災 etc.]

私が最初に文男先生とお会いしたのは、1962年4月、東北大学川内分校（教養部）で受講した経済学部2年次専門科目「ドイツ語経済書講読」の授業で、テキストはKarl Marx, *Lohnarbeit und Kapital*であった。最後に先生とお会いしたのは亡くなる2日前、2007年12月28日、大村 泉氏（東北大学経済学部教授。服部遺文庫引き渡しの服部門下側責任者）と共に入院中の大学病院に御見舞した時で、ご家族の付き添いの下、先生は酸素マスクをしたま